好酸球性と好中球性の慢性副鼻腔炎における細菌検査の比較

廣津幹夫　小野倫嗣　加瀬　香　楠　威志　池田勝久
順天堂大学 医学部 耳鼻咽喉頭頸部外科

慢性副鼻腔炎の病態は，アレルギー性鼻炎や喘息の合併により多様化しつつある．その中で細菌感染は重要な要因である．今回我々は中等度～高度病変の好中球性と好酸性の慢性副鼻腔炎の洞内細菌に関して調査を行った．2008 年 1 月～ 2010 年 4 月までに当科で慢性副鼻腔炎と診断され，内視鏡下副鼻腔手術を必要とした 106 症例を好酸球性・好中球性症例に分け，上顎洞を中心とした副鼻腔内容物の好気性菌・嫌気性菌・常在菌の検出菌を列挙し，検出率を菌体及び検体の観点から比較した．検出率の比較では，菌体・検体どちらにおいても，好酸球性・好中球性症例で有意な差をみることはできなかった．好酸球性症例において，病原性を有するであろう細菌の中で MSSA が比較的多く検出された．これは，鼻茸の生成に，細菌が産生する superantigen の関与を示唆している可能性があることを窺わせる結果であり，鼻茸及び周辺組織の精査が必要と考えた．今回我々が得た嫌気性菌の検出率は文献などによるデータよりも低値であった．内視鏡によるより厳密な起炎菌検索を行うためには，嫌気状態を保持した中での検体採取と早期の検体精査が不可欠であり，採取方法に関しても検討を要すると思われる．また，常在菌のみ検出された検体がどちらの症例においても約 4 割となっており，本来副鼻腔内に存在することが少ない corynebacterium などが多く検出されていることから，慢性副鼻腔炎の病態に常在菌が何らかの関与を持っていると考察される．